

金印「漢委奴国王」の読みと意味について

黄 當時

1. はじめに

志賀島出土の金印「漢委奴国王」の五文字をどう読むかは、人々を悩ませてきた問題である。「委奴」の「委」は「倭」を省画¹⁰⁾したもので「ワ/わ」と読み日本を指す、ということはわかって、¹⁰⁾「奴」をどう理解するのか、ということがよくわからないからである。今日では、一般に、三宅米吉説に従って「漢の委の奴の国王」と訓んでいるが、依然、異説が唱えられ、決定打ではない。

わのな-の-こくおう-の-いん 【倭奴国王印】

一七八四年(天明四)、筑前国(福岡県)粕屋郡志賀島^{しかのしま}から出土した金印。二・三センチ^{センチメートル}平方で「漢委奴国王」の文字がある。後漢の光武帝が五七年、同地方にあった小国家の君主に与えたものと見られている。漢委奴国王印。

『広辞苑』第五版 p. 2877)

かんのわのなのこくおう-の-いん 【漢倭奴国王印】

天明四年(一七八四)、福岡市東区志賀島(しかのしま)で発見された金印(きんいん)。縦、横とも二・四センチ^{センチメートル}、高さ〇・九センチ^{センチメートル}の上に高さ一・五センチ^{センチメートル}の鈕(つまみ)がついていて、印面には「漢委奴国王」の文字が刻まれているが、「委奴」は「倭奴」かという。「後漢書-東夷伝」の光武帝が、朝貢した奴国に印綬を授けたという記事に照応するものと考えられている。倭奴国王印。いどこくおうのいん。金印。

『日本国語大辞典』第二版第三巻 p. 1372)

『広辞苑』 委(倭)奴は志賀島地方にあった小国家 ?

『日本国語大辞典』 朝貢した奴国に印綬を授けた ?

『後漢書』(建武中元は、後漢、光武帝の年号、その二年は、西暦 57 年)

建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極南界也。光武賜以印綬。
[卷八十五、東夷列傳第七十五]

(中元)二年春正月辛未、初立北郊、祀后土。東夷倭奴國王遣使奉獻。

[卷一下、光武帝紀第一下]

倭 1. wēi 於爲切, 平, 支韻, 影。

○説文: “順兒。从人, 委聲。詩曰: ‘周道倭遲。’ ” 參見“倭遲”。

2. wō 烏禾切, 平, 戈韻, 影。

㊦古代對日本人的稱謂。漢書地理志下：“樂浪海中有倭人，分爲百餘國。”
注引魏略：“倭在帶方東南大海中，依山島爲國，度海千里。”

【倭₂奴】古代日本的別稱。後漢書光武帝紀下：“中元二年春正月，……東夷倭奴國王遣使奉獻。”新唐書二二〇東夷傳日本：“日本，古倭奴也。……使者自言國近日所出，以爲名。”
〔『辭源』第一冊 p. 0234〕

倭 形声 声符は委。委は稻魂を被って舞う女の形で、その姿の低くしなやかなさまをいう。〔説文〕^{八上}に倭を「順ふ兒なり」とし、「詩に曰く、周道倭遲たり」と〔詩、小雅、四牡〕の句を引く。〔毛伝〕に「歴遠の貌なり」とあって、倭遲は疊韻の連語。倭遲はまた威夷・透遲などにも作る。委はもと田舞の状をいう字で、男が稻魂を被って舞うのは年、女を委といい、委声の字はその声義を承ける。わが国の古名として古く中国の史書にみえ、〔漢書、地理志、下〕に、「樂浪海中に倭人あり。分れて百餘國となる」、〔魏略〕に「倭は帶方東南の大海中に在り。山島に依りて國を爲す」「その舊語を聞くに、自ら太伯の後なりと謂ふ」などの語がある。〔後漢書、光武紀〕にみえる倭奴国も、その古名であろう。
〔『字統』 p. 922〕

この二書は、倭そのものは日本あるいは日本人の意で、倭奴は日本の意とするが、一方、例えば、『学研新漢和大字典（普及版）』 p. 117 は、次のように説明する。

倭 《名》昔、中国で、日本および日本人をさしたことば。▷背が曲がってたけの低い小人の意。「倭夷_フ」「倭人在帶方東南大海之中＝倭人は帶方の東南大海の中に在り」〔三国志・魏書・倭人〕

【倭夷】_フ {倭奴}_ト 昔、中国人が日本人を卑しんでいったことば。▷「夷」は、昔の中国人が東方に住む異民族につけた呼び名。

倭奴は「日本人を卑しんでいったことば」 ?

倭奴は日本ではなく日本人 ? 倭奴国は日本国ではなく日本人国 ?

英国、米国は英(吉利)人国、(亜)米(利加)人国 ? 露国は露(西亜)人国 ?

『学研新漢和大字典（普及版）』は、真偽不明なことを平然と記載している。

「漢委(倭)奴国王」は、金印が鑄造された頃の人々には理解が難しい言葉ではなかったはずなのに、後世の人々には何故理解できなくなったのであろうか。

言語の面で、その頃の人々と同程度の知識がないために理解できないのではないかと、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性があるのではないかと。

「漢委(倭)奴国王」の五文字は、その一部がいわゆる海の民の言語なのではないかと。

2. 有用な知見

2-1. 枯野、軽野

茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『古事記』や『日本書紀』が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」(『古事記』)、「枯野、軽野」(『日本書紀』)が使われたのではないかと推論している。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった。[茂在寅男 1984, p. 32]

井上夢間(筆名。本名、政行)氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます(ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化するとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」)。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」(マオリ語では、タウルア、TAURUA)と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、
「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、
「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、
「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であった事柄を言語学的に解明したもので、私たちの研究に突破口を開くものであった。

(引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>。Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている)

2-2. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。〔寺川真知夫 1980. pp. 141-142〕

巻第二十（四三三六）

防人の 堀江漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく 恋は繁けむ

小島憲之、木下正俊、東野治之 1996. p. 390 : 「伊豆手船—伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。(原文は、伊豆手夫禰)」。

卷第二十 (四四六〇)

堀江漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ 水脈速みかも

小島憲之、木下正俊、東野治之 1996, p. 437 : 「伊豆手の舟→四三三六 (伊豆手船)。
歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。(原文は、伊豆手[●]乃[●]舟[○]乃)」。

異文化の語彙 (外来語) を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくい、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採用ことが多い。

beer	啤 + 類名 → 啤酒 pījiǔ	(扎啤 zhāpī)
card	卡 + 類名 → 卡片 kǎpiàn	(信用卡 xìnyòngkǎ)
xx	手 + 類名 → 手夫衾	
xyyy	手乃 + 類名 → 手乃舟	

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。

全称の「手乃」は二音節であり、一音節少ない略称にするには、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残すか、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残すか、の二つの選択肢しかない。全称の「手乃」と略称の「手」は、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造の存在を示している。

ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。

例えば、女性の名前に、菊乃(野)、雪乃(野)、幸乃(野)、綾乃(野)、等がある。名付け親は、女の子に付けるのにふさわしい名前、というくらいの意識や知識しかなく、乃(野)を付さない、菊、雪、幸、綾、等との違いは、わかっていないであろう。このことは、学者、研究者でも同じで、乃(野)の有無に意味の違いがあることは認識していないし、また認識できず、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、というくらいのことしか説明できないのではないだろうか。

人名の乃(野)は、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡であるが、今日まで受け継がれており、心理の深層では過去の言語習慣 (慣習) に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である。

卷第十二 (三一七二)

浦廻漕ぐ 熊野船着き めづらしく かけて俣はぬ 月も日もなし

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995b, p. 369 : 「浦廻漕ぐ—津々浦々を漕ぎ巡る、の

意で、熊野船の特性を述べた修飾語。熊野船着き一熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったのであろう。(原文は、熊野舟附)。

卷第六 (〇九四四)

島隠り 我が漕ぎ来れば ともしかも 大和へ上る ま熊野の船

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995a, pp. 121-122 : 「島隠り—この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。ま熊野の船—マは接頭語。熊野は熊野船 (三一七二) としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。(原文は、真熊野之船)」。

卷第六 (一〇三三)

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の 小船に乗りて 沖辺漕ぐ見ゆ

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995a, p. 162 : 「ま熊野の小船→九四四 (ま熊野の船)。(原文は、真熊野之 小船尔乘而)」。

卷十四 (三三六七)

百つ島 足柄小舟 あるき多み 目こそ離るらめ 心は思へど

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995b, p. 464 : 「足柄小舟—足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」(三九一)ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。(原文は、安之我良乎夫祢)」。

「小/乎」という文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」もしくは「こ」を書き記した(「を」もしくは「こ」の音声を示している)ということだけである。

「手」「手乃」と「小/乎」は、船を意味する異文化の語彙(外来語)を音訳したもの(書き記したもの)ではないか。

「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、「小/乎」は「kau」を書き記したものであろう。

kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野 ; kau-nui、狩野 ; tau-nui、手乃

tau、手 ; kau、小/乎

地名の例

広島県福山市金江町:江に金(属)があるのではなく江に kau-nui (船-大きい)がある。同、金江町金見、金江町藁江 : 金(属)が見えるのではなく kau-nui (大型船)が見えるのであり、江に(稻/麦)藁があるのではなく、江に waa-lua (双胴船)がある。また、志

賀島の叶崎^{かなのさき}や、高知県土佐清水市の叶崎^{かなえざき}も、何かの願いが（いつも、よく）叶うからではなく、kau-nui（大型船）が（いつも、よく）通ることで名付けられたものであろう。長崎県福江市、田浦：浦（の近く）に田圃があるのではなく、浦（そのもの）に tau-nui（大型船、もしくは、tau、船）があることで名付けられたものであろう。

3. 漢委奴国王

3-1. 委(倭)奴

委(倭)奴の読み方には諸説ある。

文化庁編『国宝事典 新增補改訂版』（便利堂、1976年、p. 283）の「考古 金印^{きんいん}」の項では「その訓みについてはなお定説をみない」とし、渡邊静夫編『日本大百科全書』（7、小学館、1986年、p. 194）の「金印」の項は、次のように説明している。

読み方には諸説あるが、……一八九二年（明治二五）三宅米吉^{みやけよねきち}により「漢^{かん}の委^わ（倭）の奴の国王」と読まれ、奴を古代の儼^な県、いまの那珂郡^{なのあがた}に比定されて以来この説が有力である。〈井上幹夫〉

しかしながら、「漢委奴国王」をこのように読む（「漢の委の奴の国王」と三段に区切る読み方をする）のは、間違いである。

中国古代の印文は、「授与する側+授与される側」の二段に区切る読み方をする。金印の下賜は、与える側（漢）と与えられる側（委(倭)奴）の二者の直接の統属関係を示すものであり、AのBのCという三段服属の関係を示さない。金印の印文は、解析が可能かどうか、という予想や判断にかかわりなく、「漢の委奴の国王」と二段に区切って読むしかないのである。

三宅説は、基礎の部分で認識に誤りがあり、信用性はないに等しい。そのため、今日なお、異説が唱えられ、それは、今後も幾度となく繰り返されることであろう。

多くの学者・研究者が二段に区切る読み方を提唱しているが、最近発表された論文に、大谷光男 2011³⁰³がある。大谷氏は『後漢書』から皇帝が周辺の蛮夷に授けた金印紫綬の史料 7 例を再検討し「後漢の皇帝が蛮夷諸国に授けた金印紫綬は、一国^{國家}に授け、国内の一部族（国）に授けられることはなかった。したがって、問題の金印「漢委奴国王」の読み方で、「カンのワのナのコクオウ」と訓む三宅説は退けられることになる」と結論付けている（大谷光男「金印蛇鈕「漢委奴国王」に関する管見」『東洋研究』第 179 号、pp. 1-33、大東文化大学東洋研究所、2011、pp. 12-14）。

現時点において、二段に区切る読み方（AのBC、漢の委(倭)奴）を採る者であれ、三段に区切る読み方（AのBのC、漢の委(倭)の奴）を採る者であれ、委(倭)奴の意味は、まだ正確にわかったわけではなかろう。

中国側が日本を委(倭)と呼んだ(名付けた)というのは、誤解である。

委(倭)奴は、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した「ワ/わ+α」という音声情報を中国の史官が文字情報に変換したもの、と考えるべきである。変換の過程においては、極めて高度な漢字の知識を持つ者が聴取・記録を担当しており、提供された音声情報を忠実に反映する漢字が選ばれたものと考えられる。また、表記を確定する前に、選ばれた漢字が提供された音声を正しく反映しているか、確認の過程があったろうことは想像に難くない。

従って、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報「α」は、当然のことながら、「ナ/な」である可能性はほとんどない。なぜなら、仮に、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者は、「ナ/な」という音声情報を伝達するのに最も相応しい漢字(例えば、奈、那)を用いて記録したことであろう。言い換えれば、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者の選択肢の中に「奴」という漢字が存在する可能性はほぼない、と考えてよい。

中国の史官には、極めて高度な漢字の知識があり、提供された音声情報がたとえ「ナ/な」であったとしても、それを「奴」という文字情報に変換することは、ほぼありえず、倭人(委(倭)奴国の使人)の提供した音声情報も「ナ/な」ではなかったと考えてよい。

「奴」は、倭人(委(倭)奴国の使人)の提供した「ド/ど、或いは、ヌ/ぬ」という音声情報を文字情報に変換した表記である。私たちには、「奴」を「ナ/な」と読む選択肢はないし、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、「奴」は「ド/ど、或いは、ヌ/ぬ」を示している、という認識で解析せざるをえないのである。

先程、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者の選択肢の中に「奴」という漢字が存在する可能性はほぼない、と述べたが、ほぼ、と言うのは、『学研新漢和大字典(普及版)』p.426が、上古音として、**naɡ**、を挙げているからである³⁰¹⁾。三宅米吉が奴を「ナ/な」と読むことで、古代の儼^な、今の那珂郡に比定し、後に藤堂明保、加納喜光両氏の再構する上古音と一致するのは偶然であった。奴が「ナ/な」を書き記したものではないことは、後でも触れるが、三宅米吉は、どうしても「ナ」に読みたいのであれば、三段に区切って「ワのナ」と読むのではなく、二段に区切って「ワナ」と読むべきであった³⁰²⁾。

次に、中国人が日本を蔑視したものとする向きがあるが、その見方は正しいのであろうか。ここで、『新字源』『広辞苑』の記述を見ておきたい。

『新字源』【倭人】^{わじ} むかし、中国人が日本人をよんだよび方。

【倭奴】^{わど} むかし、中国人が日本人をいやしめていったよび名。

『広辞苑』わーじん【倭人・和人】中国人が日本人を呼んだ古称。

わど【倭奴】〔新唐書^{東夷伝、日本}〕古代中国人が日本人を称した語。→倭奴
国^{わど}
わぬ【倭奴】⇒わど

『新字源』『広辞苑』ともに、倭人（和人）を、むかし、中国人が日本人をよんだよび方/古称、とするが、この説明が間違いであることは既に述べた。委（倭）奴は、倭人（委（倭）奴国の使人）が提供した「ワ/わ+α」という音声情報を中国の史官が文字情報に変換したもの、と考えるべきである。

『新字源』は、倭奴を「わど」一読としているが、奴の字音は、ド（漢）、ヌ（呉）の二音であり（p. 251）、根拠もなく、倭奴は「ワド/わど」一音である、と断定することはできない。一方、『広辞苑』は、倭奴を「わど」「わぬ」とするものの、倭奴国を「わどこく」一読としている。また、『広辞苑』は、倭奴を、古代中国人が日本人を称した語、と奴の字面に囚われて間違った説明をしており、『新字源』はさらに、「むかし、中国人が日本人をいやしめていったよび名」と間違いに輪をかけた説明をしている。要するに、『新字源』『広辞苑』とも、倭奴の意味が正確に取れていないのである。小川環樹、西田太一郎、赤塚忠諸氏、新村出氏は、そのような情報をどこから入手したのであろうか。その情報の信頼度は検討されたのであろうか。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字に分類されるように、表意力が強いいため、漢字を理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味に囚われずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている（ことを見抜かねばならない）ケースでも、字形が示唆する意味で解け（た気分になれば）、思考がそこで停止する。このような経験は、意識するしないにかかわらず、恐らく誰もが持っているであろう。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが少なからず生じるのである。

後置修飾語が普通に使われているうちは、「委（倭）奴」の構造がわかり、意味が取れるため、何ら問題がなかったが、後置修飾語が使われなくなると、「委（倭）奴」の構造がわからず、意味が取れなくなり、字面のみに依拠して意味を取ろうとしたために、「奴」に蔑みの意味があるのではないか、と考えるようになったものと考えられる。根拠なく、ただ、こうだ、こうだろう、と言うのは、付会の域を出ないもの、と見られかねない。

既に例示したが、『学研新漢和大字典（普及版）』は、「倭奴」の正確な意味を理解しないまま「ワド」の読みを当て、「昔、中国人が日本人を卑しんでいったことば」と誤った説明をしている。卑しみの意があるかどうか、という点では、奴隸（どれい）や奴婢（ぬひ、どひ）という単語があるから、「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」とも同じである。また、『学研新漢和大字典（普及版）』は、真偽不明なことを平然と記載している辞書の一例に過ぎない、と述べたが、『新字源』『広辞苑』もその例に挙げられることは、ご理解いただけよう³⁰³。

例えば、黄麻、黄金、黄河の読みは、恐らく習慣であろう、としか説明できない。

委(倭)奴には、一読(「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」のいずれか)と二読(「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」の両者)の可能性はあるが、忘れ去られた単語であるため(但し、単語そのものは忘れ去られたものの、単語の持つ意味や概念は、気付かれてはいないが、健在である)、一読だったと仮定しても、「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」のいずれであったか、さえもわからない。委(倭)奴の意味がわからず、当時の読みの習慣もわからないからである。

押し付けられた呼称は、捨てる自由があれば、捨てればよい。特に、それが気に入らないものなら、なおのこと、さっさと捨てればよい。捨てる自由がなければ、無視して使わないくらいのことはしてもよいのではないか。捨てなければ捨てられるにもかかわらず、気に入らないのにその素振りも見せずに「押し付けられた気に入らない蔑称」なるものを使い続けるほど日本人は柔^{やわ}ではなからう。

和は、委(倭)を書き改めたものであるが、こちらはどのように考えればよいのであろうか。意識するしないにかかわらず、「押し付けられた気に入らない蔑称」なるものが定着してしまったために変更するのもままならず、やむなく委(倭)を表記上だけ和に書き改めて言葉そのものは引き続き使用している、という見方をすることになるが、それで果たして正しいのであろうか。

委(倭)は「押し付けられた気に入らない蔑称」という言説を口にしながらも、その「蔑称」なるもの(の表記改良形式、和)を至る所で胸を張って使い続ける者は、自己の論理や言動の矛盾に気付かないのであろうか。

委(倭)奴は、上述の通り、自分たちのことを「ワ/わ+α」と称した人々が提供した音声情報を文字情報に変換したもの(漢字で表記したもの)、と見てよい。中国人がそれらの人々を委(倭)奴と呼んだり名付けたりしたから、その人たちが自分たちのことを委(倭)奴と言うようになったわけではないのである。

そして、和は、委(倭)と表記された単語の表記を書き改めたものではあるが、表記の元になった単語(概念)は、日本人自身が使用していた「ワ/わ」という呼称であり、日本人は、その呼称を引き続き使用しているに過ぎない、と見るのが正しい。

ワ/わ/委/倭/和は、「押し付けられた気に入らない蔑称」などではなく、日本人が元から使用している由緒ある呼称であり、胸を張って使えばよい。

くどいようだが、長年の広範囲に亘る誤解があるので、「倭」という表記ができる過程を再確認しておきたい。古代日本人は文字を知らなかったために、文字の選定は中国人に任されたが、「ワ/わ」という音声情報は、日本人が中国人に提供したものであり、中国人が音声情報をも日本人に提示したものではない、ということである。そして、中国人は、提供された音声情報に合致する文字を選定したが、選定の基準は、恐らく、提供された音声に忠実かどうか、であり、表記を確定する前に、選定された漢字が音声を正しく反映しているか、確認の過程があったことは想像に難くない、ということである³⁰⁴⁾。

3-2. 加良奴 (加良怒)

委(倭)奴を卑字と見る向きもあるが、その見方は正しいのか、委(倭)奴はやむをえない選択の結果ではないのか、は一考の余地があつてよいであろう。

漢詩は、作法上、漢字を平と仄に区別し、韻律に基いて配列する。そのきまりは複雑なため、一般に書物で確認しながら作詩するが、最低限守らねばならない規則に、二四不同、二六対、というものがある。二四不同、二六対とは、それぞれ、二字目と四字目の平仄を違える、二字目と六字目の平仄を揃える、という意味である。五言の場合、二四不同、という約束を守ればよい。

辻本春彦先生は、唐の詩人李白の秋浦歌を取り上げて次のように述べた。詩の中とは言え、白髪が九キロメートルある、という中国人は何と大袈裟な民族なのか、と日本人は考えているが、果たして李白のこの詩からそのような理解ができるのであろうか。

この詩の二字目と四字目の平仄は、以下の通り (平は○、仄は×で示す。以下同じ)。

白髪三千丈　縁愁似箇長　不知明鏡裏　何處得秋霜

また、基本数字 (便宜上、十は重複して扱う)、単位数字の平仄は、以下の通り。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。　十、百、千、万、億。

平仄の規則を守る限り、李白には、三十丈、三百丈の選択肢はなかった³⁰⁵⁾。

白髪三千丈の千は、やむをえない選択の一例であるが、ここで、仁徳天皇がある船を詠んだ歌を見ておきたい。ある船とは、今日、通常、枯野(船)と呼ばれる船で、『古事記』(下巻、仁徳天皇)の原文表記は、加良奴(荻原浅男、鴻巣隼雄 1973. p. 289)、加良怒(山口佳紀、神野志隆光 1997. p. 304)である³⁰⁶⁾。

加良奴袁　からのを　(枯野を)
志本爾夜岐　しほにやき　(塩に焼き)
斯賀阿麻理　しがあまり　(其が余り)
許登爾都久理　ことにつくり　(琴に作り)
賀岐比久夜　かきひくや　(かき弾くや)
由良能斗能　ゆらのとの　(由良の門の)
斗那賀能伊久理爾　となかのいくりに　(門中の海石に)
布礼多都　ふれたつ　(触れ立つ)
那豆能紀能　なづのきの　(浸漬の木の)
佐夜佐夜　さやさや　(さやさや)　[荻原浅男、鴻巣隼雄 1973. p. 289]

同一の文書内では、一般に、同一の音声は同一の文字で書き記される。言い換えれば、同一の文書内では、同一の音声を異なる文字で書き記すことはない、と考えてよい。

奴は「ノ/の」とも読めるが、この歌の中では、能を「ノ/の」と読んでいるので（「ノ/の」という音声情報は能という文字情報で書き記されているので）、奴は「ヌ/ぬ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよかろう³⁰⁷⁾。逆に、奴は「ノ/の」という音声情報を書き記したもの、と誤解すると、「ヌ/ぬ」を表記する文字（漢字）がなくなってしまう。また、解析の精度を確保するには、枯野と書き換えたものではなく、原文の加良奴（加良怒）のままの漢字表記に基づいて解析した方がよい。

加良奴（加良怒）は、「からぬ/カラヌ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよかろう。漢委奴国王における委奴という表記は、当時の聴取・記録担当者には最高の選択肢だった、と考えてよいのではないか。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。日本語を例にとると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的にレポートやリポートの揺れがある。関西でヘレと言う肉は、関東ではヒレと言うことが多いと聞く。また、一部のレストランでは、フィレとも言っている。「奴」と「怒」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（或いは、できなかった）ために生じている。『記』『紀』がそうしなかった（或いは、できなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。

『記』『紀』の編纂者は、語部(集団)の提供する情報を淵博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われた。

3-3. 正確な読解

さて、読めるとは何であろうか。正しい音声で読み、意味が正しく取れる、ということである。例えば、

There were three houses on the top of the mountain.

は、houses を[hauziz]と読みを間違えても、意味は正しく取れよう。しかし、

前面有家食堂。

は、一字一句を正確に読んでも、前にファミリーレストランがある、と解釈するなら、意味は取れていないことになる。

三宅米吉説は、定説としてほぼ定着したようであるが、残念なことに、この説は、委(倭)奴を読めてもいないし、意味も取れていない。

漢委奴国王は、二段に区切って読むのが正しく、三段に区切って読むのは間違いであり、解析が不可能に見えても、漢委奴国王を例外に扱うことはできない。また、「奴」の読みも「ド」「ヌ」のいずれか、と考えるべきである。三段に区切る読みを出発点とする三宅説は、言わば宿痾に苦しむかのように、今後も幾度となくその欠陥に苦しむ続けるであろう。

私たちは、解析に必要な知識（装備）を入手してきたが、そろそろ、委(倭)奴や奴が何を意味するのか、委(倭)奴や奴は当時の人々が何と言っていた単語を書き記したものであるのか、が理解できるようになったのではないだろうか。

委(倭)奴は、日本人が当時普通に使用していた語彙を漢字で表記したもの、と見てよいが、ここで、後置修飾語の例を少し見ておきたい。

フランス語の Mont Blanc は、前置修飾語で言うなら、英語の white mountain に相当しようし、英語には、There is something noble about him. や a friend in need is a friend indeed のような後置修飾表現もある。中国語の共通語では、おんどり、めんどり、を、公鶏、母鶏、と言うが、南方方言では、後置修飾表現で、鶏公、鶏母、と言う。

日本語では、先に例示した（2-2.『万葉集』の船）、手乃 (tau-nui、手-大きい、大きな手、大型の tau。tau は、地域により、田、多と書かれることもある)、加良奴/加良怒、枯野、軽野 (kaulua-nui、加良/枯/軽-大きい、大きな加良/枯/軽、大型の kaulua) の例がある。なお、kaulua は、唐と書かれることもある³⁰⁹⁾。

彦火出見尊^{ひこ}や比売多多良伊須気余理比売^{みこと ひめ}は、後置修飾型の彦-火出見^{ひこ}や比売-多^{ひめ}多良伊須気余理と、前置修飾型の火出見^{みこと}-尊^{ひめ}や多多良伊須気余理-比売とが混在して使われる言語空間で双方の形式を取り入れた表記である。今日風に言えば、ミスター久留米と久留米さんとを一語に取り込んで、ミスター久留米さんと言うようなものである。

異文化の語彙（外来語）は、異文化の語彙（外来語）の知識がなければ、正確に理解できない。

母はほっとにした³⁰⁹⁾。 請給我手紙。 油断一秒、怪我一生³¹⁰⁾。

「倭奴」は、「ワ/わ-nui」を書き記したもので、「ワヌ/わぬ」と読み、「倭-大きい」（大きな倭、偉大なる倭）を意味する、と解釈するのが正しい³¹¹⁾。前置修飾表現が全国を覆うようになると、倭奴が後置修飾表現であることすら理解できなくなってしまったが、「倭」に「奴」を後置する「倭奴」は、「倭(や和)」に「大」を前置する「大倭(や大和)」の前身形であり、意味も全く同じなのである。

奴は、nui という音声情報を正確に反映する文字として、当時の中国側（そして後の日本側）の聴取・記録担当者には最高の選択肢だった、と考えてよい。しかしながら、後置修飾語が用いられなくなると、人々は、奴 (nui) の意味（大きい）・用法（後置修飾）が理解できず、奴を字面のみで判断し（漢字の表意機能のみに着目し）、卑字ではないか、卑しめの意味があるのではないかと誤解してしまった。もうおわかりであろうが、奴は、卑字などでは決してなく、あらぬ濡れ衣を着せられた悲劇の好字であった。

金印は、その印文が示す通り、漢が委奴国王に与えた印綬である。かつて委(倭)奴国は日本を象徴する存在であった。元々シンプルな表記で普通に理解できたにもかかわらず、後世の人々が委(倭)奴を理解できなくなったことは、国情の変遷を考える上で示唆的である。日本を代表する国家が後置修飾語を使用し、日本語の基層に後置修飾語の層

が存在するのである。

私たちは、漢委奴国王に、日本が経てきた歴史を垣間見ることができる。金印「漢委奴国王」は、委(倭)奴国があったことを私たちに教えてくれている。「首都大学東京」は、日本人の心理の深層に今なお曖昧に受け継がれている後置修飾表現の例と考えられる。

日本社会は、後置修飾表現を使用する社会から前置修飾表現を使用する社会へと変わり、倭奴という言い方も大倭(後に、大和)へと変わったのである。

4. おわりに

私たちは、無知とも言えるほどにいわゆる海の民のことを知らない。

金印「漢委奴国王」は、数多くの人々がその考察考証に携わってきたが、未だに決定打がない。私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、委(倭)奴の意味を取ることすらできない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明することができないのである。

私たちは、先人と同じように漢委奴国王を解析対象としながら、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。

今日の日本語の中に異文化の語彙(外来語)が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙(外来語)が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。学者や研究者は、政治家ではないのだから、外来語は想定外だった、と平然と無責任なことを言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「奴」は **nui**(大) という音声情報(意味情報を含む)を漢字で書き記したもので「奴」と読むこと、「委(倭)奴」は「委(倭)-奴」の意味構造であること、修飾語は、前置するか後置するかのいずれかしかないが、後置修飾語「奴」を用いれば「ワ/わ-奴」となる単語は、同義の前置修飾語「大」を用いれば「大-ワ/わ」となること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えるこ

とで幾つかの問題を解くことができた。古代日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないかと。

注

101) 「銅」を「同」、「和」を「禾」、「多」を「夕」としたり、「應」を「応」、「學」を「学」、「釋」を「釈」、「醍醐」を「西西」とする類で、省筆、略筆などとも言う。「倭」と「委」は、当時、使用法に互換性があったと見てよいのではないかと。

なお、単語の読みは、一般に、構成要素の読みの総和と同じであるが、そうならないケースもある。

中国の史書に記載のある「倭奴国」に下賜された金印は未発見で、記載のない「委奴国」に下賜された金印の方が発見された、と考えるのは、客観的事実との乖離が大きく（金印の下賜は頻繁にはなく）、志賀島出土の金印「漢委奴国王」は、史書に記載された「倭奴国」に下賜された金印そのものである、と考えるのが正しかろう。また、人偏の有無を根拠に（あたかも漢が日本側のリーダー格と見なした国が二つ存在した/国名が二つあったかのように）「倭奴国」「委奴国」と異なる読み（二つの読み）をするのではなく、人偏の有無にかかわらず「倭奴国」「委奴国」と同音（一音）に読むべきである。「委奴国」の「委」が「委」と読めるから「委奴国」は「委奴国」と読むはず、と主張するのは、例えば、「上下」の読みを根拠に「上人」を読もうとしたり、「初陣」「殺陣」や「回向」「法会」で、構成要素の漢字の個々の読音を根拠に、一語全体の読みに「ういじん」「たて」や「えこう」「ほうえ」以外の読みを主張するようなものであり、意味がない。特殊な意図を持った（あるいは冷静さを喪失した）解析は、慎まねばならない。

301) 『学研新漢和大字典（普及版）』は、倭と奴の発音を以下のように考えている。

倭 - 上古音 uar 中古音・ua 近古音 uo 現代音 uə

奴 - 上古音 nag 中古音 no(ndo) 近古音 nu 現代音 nu

302) 比定地は、既発見、発見中、未発見、のいずれかであるが、解析の精度を確保するのであれば、未発見に動揺し、出発点とした(はずの)二段に区切ったの解析から転向し、三段に区切る解析を新たな出発点とするのは、論外である。

303) ミスや間違いがあれば、早めに訂正すればよい。『広辞苑』に次のような例がある。日本では、桜の咲く頃に空が薄く曇ることを「花曇り」と言い、春の季語にもなっている。これまでは水蒸気が多いためと考えられていたこの現象は、そのような説明ではもはやいけならしく、『広辞苑』（第五版）では、水蒸気が多い、という部分を削除している。古人が「花曇り」と考えた現象は、恐らく、水蒸気によるので

- はなく、どうも黄砂によるらしい、ということがわかったからではないだろうか。
- 304) 倭人の漢字の知識がどのようなものであったのか、は不明であるが、一丁字を識らなかつた、と見るのは間違いであるかもしれない。朝貢が、先進国に対する憧憬を反映したものであるとすれば、倭人が早い時期から漢字の習得に努めた可能性は十分に高く、委(倭)奴は、後漢の光武帝から日本側のリーダー格と扱われたほどであり、漢字を知る使者を手配できたのではないか。
- 305) 五言絶句仄起式では、初句の三四五字目は平平仄とする。
- 306) 荻原浅男、鴻巣隼雄 1973, p. 288 は、「^{からの}枯野」に次のように注釈を付している。応神紀・五年の注記に「^{がる}軽野の」の訛語という。速く走る義か、あるいは船材の産地による命名か。良い船材を産した伊豆国の地名としては静岡県三島市修善寺町中狩野の地か。
- 山口佳紀、神野志隆光 1997, p. 305 は、「^{からの}枯野」に次のように注釈を付している。船の名としての意味は未詳。『播磨風土記』逸文に仁徳天皇の飲み水を朝夕運んだ「速鳥」という名の船の話がある。それと関連させつつ、「枯」は「軽」に通じ、船の速さをいうとみる説があるが、『紀』の用字法と合わないので従えない。
- 307) 「万葉集」では奴はヌ(甲乙はない)にしか使わない。(中西進『万葉集 全訳注原文付(一)』講談社、1978年、p. 26)
- 付言すれば、平仮名・片仮名ができた過程から見ても、「奴」は、草書から「ぬ」、右側の旁から「ヌ」ができたように、「ヌ/ぬ」が主体である。
- 308) 「kaulua が利用する津」の後置修飾表現 vs 前置修飾表現に、津軽 vs 唐津がある。
- 309) 母は熱いコーヒーをもらうことにした、の意。
- 310) 中国語の意味は、それぞれ、「どうか私にトイレトペーパーを下さい」「油(の供給)が一秒でも止まったら、私は自分を一生咎めます」である。
- 311) 漢字が表意で用いられているのか、表音で用いられているのか(日本語のカタカナのような使い方をしているのか)、はケースバイケースで見るとはわからないであろうが、参考例を一つ挙げておきたい。
- 熱狗 熱い犬、ホットドッグ(漢字の読み règǒu には意味がない)。
哀鳳 āifēng という読みの意味がある(哀しい鳳には意味がない。アイフォン)。